「おふでさき」の有機的展開（10）

第二号：第一首～第十二首

おやさと研究所嘱託研究員
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

第二号は全部で四十七首と歌の数が比較的少ない号である。先行研究を参考にすると各首は内容的におおよそ次のようなグループに分けることができる。

（1）上に立つ人々も勇んでくる（1～10）
（2）気の間違いは病ではない（11・12）
（3）「神の打ち分け場所」（13～17）
（4）「屋敷の掃除」（18～24）
（5）「高山の池」と「水を澄ます」（25～30）
（6）「から」と「にほん」（31～36）
（7）「高山」と「火と水」（37～43）
（8）「かんろだい」（44～47）

第一号では「道」や「ほこり」が信仰のプロセスや心のあり方の比喩として語られ、「かぐらづとめ」の実行が促されていたが、第二号ではそれらに加えて、「上」という言葉が頻繁に使われ、「から」（「とふじん」）や「にほん」、「火」や「水」といった「おふでさき」に特有の言葉がいくつか登場している。大まかに言えば、第二十四首までの前半は主に病気の捉え方について述べており、それから「高山の池」や「からとにほん」の話に移り、最後に「かんろだい」について少しふれている。

それでは最初から順にみていこう。第二号も第一号と同様に「これからは広々とした道をつけて、世界の心を皆勇める」と「せかい」を対象にした歌から始まっている。「勇める」とは「たすける」とほぼ同義で、親神の救済の一つの様態を表している。「広々とした道」は「往還道」と表現されており、『注釈』によれば、それは「貧富貴賤或いは民族の如何を問わず、普く広く世界一列を救ける道」を意味する。つまり、「せかい」という語と同じように、親神の「勇める」対象が全世界であることを示している。

続く第二首では「上」や「上たる」という言葉で「上に立つ人々」についてふれて、「上に立つ人々の心が勇んで出てくる（何時にくる）、刻限が来た」と歌っている。「上」は「カミ」と読むことから同音の「神」と度々対比され、その際、「上に立つ人々」は「せかい」に対する影響力が大きく、その結果親神の思いが人々に伝わり難くなっている状況が残念であるという意味合いで歌われることが多い。「おふでさき」が記された頃の「屋敷」（中山家）の状況を考慮すると、「上に立つ人々」とは人々の信仰を妨害しに来る山伏・僧侶、論難を持ち込む医者、そして当時の政府の意向を受けて取締りにくる警察などと解せられるが、当時はそういった「上に立つ人々」が「何時やって来るか」分からない状況であったことから、第二首の「何時に来る」とはそのような緊迫する状況を表す言葉としても捉えられる。

「刻限が来た」の「刻限」とは何か。それは親神が指定する時刻であり、参考書によれば、それは何月何日の何時何十何分というところまで指す。そのことを踏まえて第二首を解釈すると、警察など「上に立つ人々」が取締りに中山家にやって来るという状況は信仰を妨害される人々にとっては理不尽な事態と見えがちであるが親神の目から見ればそれもまた一つの時節の現れとして映っている、となる。さらに、第三首で「茶摘みが済んで後刈りをしたら、その後は陽気づとめや」と歌われていることを鑑みると、刻限としての“その時”は親神の思惑に基づくのみでなく人々の生活リズムにも反映して、具体的には「陽気づとめ」を実行する時であると考えられる。そして、「陽気づとめ」においては茶摘みに精を出すような生活者だけでなく、「上に立つ人々」も「勇んでくる」と説かれている（二号4）。

このようにいわゆる山伏や医者や警察による信仰の「妨害」と捉えられるような厳しい状況も親神の目から見ればその意味合いは大きく異なり、それを第二号は「親神の守護（働き・尽力）というものは不思議なもので、誰も思いかけないような事をだんだんと始める」と歌っている（二号5）。しかし、そのような親神の意図を人々は容易には理解できない。その為、親神は続けて「日々に世界の救済を急いでいる親神の心を世界中の人間は何と思っているのか」（二号6）ともどかしく思う気持ちを吐露している。

「陽気づとめ」の実行こそが「おふでさき」の主眼の一つである。第二号では「陽気づとめ」の意味合いやその全貌はまだ明らかにされてはいないが、中山みきは「おふでさき」を執筆する以前にすでに人々に「つとめ」の踊りの振り付けと節付けを行っており、「つとめ」を勤める場所の建設も人々の手によって遂げられていた。そして、「陽気づとめ」の実行においてとりわけ重要なことは「陽気づとめ」を勇んで勤める人々（「つとめ人衆」）を集めることである。

信仰者は多くの場合、最初病気のたすかりを願ってみきを訪ね、病気の回復という利益に預かり、それに対する報恩の心でみきを慕ううちに親神が「陽気づとめ」を望まれていることを教えてもらうというプロセスを辿るが、それは親神の側から言えば「陽気づとめ」を完成させるために、一つの病気を通してその人の「手を引く」かのごとく、親神が「つとめ人衆」を引き寄せたと言える。そのことを第二号は「それが何であれ病気というものはなく、神が急いで手を引いているのである」（二号7）と述べ、さらに「何故急いているのかと言うと、つとめ人衆が欲しいからである」（二号8）と歌っている。そして、この「陽気づとめ」が病気や災難や人間関係の縺れなどあらゆる困難を治める「よろずたすけ」を果たし、しかも、その救済は今だけのことではなく後代へと続いていくことを明らかにしている（二号9・10）。

そして、続く第十一・十二首はある男性信者の状況を指して歌われており、このような病気を通して為される親神の「手引き」の具体例を示している。当時、その信者は信仰から幾分疎遠になっており、家では娘が気のふれた状態になって嫁ぎ先からも離縁されていた。しかし第十一首は、それは普通一般に言われているような意味での病気ではなく、親神が世界の救済を急いでいることの徴であると述べる。つまり、親神はその家の人々を世界の救済に役立てようと親神の方へと引き寄せたのであり、その家が当時信仰から疎遠であったことから娘の病を通して再び親神の話を熱心に聞くことを促したのであった。かくて、この諭しを受けたこの男性信者は再び熱心に信仰し、娘の精神も回復して復縁できるようになったと伝えられている。

このように「おふでさき」は人が病気になることの意味合いを親神の視点から示して、それが単なる病気ではなく親神による「手引き」であり、「陽気づとめ」を勇んでつとめる人材を求めていることを意味する。